

開催報告(二)

講演会・シンポジウム

親鸞聖人

ことばの織りなす力

はじめに

浄土真宗本願寺派総合研究所では、2019（令和元）年9月4日（水）、龍谷大学響都ホールにて、講演会・シンポジウム「親鸞聖人 ことばの織りなす力」を開催いたしました。

宗門では、1982（昭和57）年より第2期宗門発展計画を起点として「浄土真宗聖典」の編纂事業を推進しており、これまでに、『浄土真宗聖典（原典版・原典版七祖篇・註釈版・註釈版七祖篇・註釈版第二版・現代語版）』を刊行しています。そして、2011（平成23）年の親鸞聖人70回大遠忌法要を機縁として、『浄土真宗聖典全書』の編纂を進めてまいりましたが、

2019（平成31）年3月、第6巻「補遺篇」の刊行をもって全6巻が完結しました。

『浄土真宗聖典全書』は、これまで宗門内で編纂されてきた聖典の精神を受け継ぎつつ、最新の学界の動向に注視し、善本として高い評価を受けている史資料を翻刻した、「浄土真宗聖典」の集大成です。今後は、本聖典によって親鸞聖人のみ教えが研鑽され、伝道が進められていくことが期待されます。

そこで、宗門総合振興計画の事業として、「仏教界の英知の結集」といえる『浄土真宗聖典全書』全6巻の完結を記念して、真宗各派や関係学校の有識者をお招きし、講演会・シンポジウムを開催いたしました。講演会・シンポジウムは、以下の流れで行われました。

一、開会挨拶

丘山 願海（総合研究所長）

二、記念講演「礎としての聖教

——聖典英訳を通して学んだこと——

徳永 一道（本願寺派勸学寮頭）

三、記念講演「親鸞聖人の漢文訓読」

佐々木 勇（広島大学大学院教授）

四、「浄土真宗聖典全書」の魅力」

田中 真（総合研究所上級研究員）

五、シンポジウム『聖典全書』の完結を承けて

——聖典の編纂と普及——

パネリスト…三木 彰円（大谷大学教授）

栗原 廣海（高田短期大学学長）

進行 役…満井 秀城（総合研究所副所長）

前回は、記念講演の内容を中心に報告いたしました。今回は、『浄土真宗聖典全書』の魅力」とシンポジウム『聖典全書』の完結を承けて——聖典の編纂と普及——」の内容をご報告いたします。

四、『浄土真宗聖典全書』の魅力

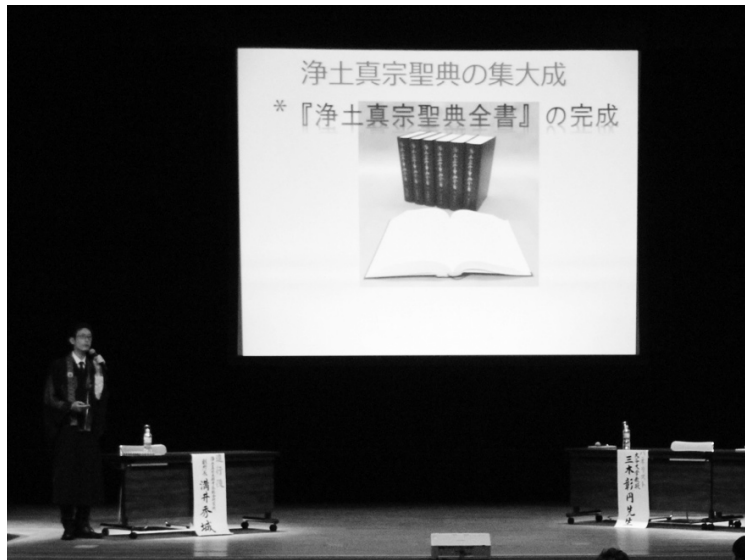
『浄土真宗聖典全書』は、15年以上の歳月をかけて、総合研究所教学伝道研究室（聖典編纂担当）で編纂・刊行を続けてきました。同担当で長年聖典編纂に携わってきた田中真（総合研究所上級研究員）より、本聖典の成立や翻刻の特徴などについて紹介いたしました。以下に概要を掲載します。

【概要】

「浄土真宗聖典」の刊行の歴史は、第8代蓮如上人に遡る。文明5（1473）年、吉崎におられた上人は、『正信偈・和讃』を開版され、勤行にも取り入れられた。これが本願寺による聖典刊行の嚆矢であり、以来、本願寺歴代宗主によって『御文章』や『浄土文類聚鈔』などが次々に公刊されてきた。江戸時代には、『浄土三部経』や『教行信証』をはじめとす

る聖教が本願寺蔵版として刊行されるとともに、親鸞聖人や覚如上人・蓮如上人などの撰述のうち和語で示された聖教を成した『真宗法要』が刊行された。

『浄土真宗聖典全書』は、『真宗法要』以来250年ぶりの大事業である。「浄土真宗聖典」の刊行の歴史や精神を受け継ぎつつ、新たな方針に基づいて編纂することで、高い史料性を保持しつつ、領解・伝道に活用できる聖典となった。



編纂にあたっては、各地の所蔵者のもとに向いて聖教調査（原本調査）を行うことから始まる。原本の本文などを忠実にデータ化するとともに、聖教本文を読みやすくするさまざまな工夫を凝らした。その成果が翻刻の特徴に表れている。例えば、引用文には出拠（しゅこ）を「本文註」として示して拝読への配慮（ほご）を施すほか、他の聖典（『註釈版』・『真宗聖教全書』・『親鸞聖人真蹟集成』など）との連絡頁を上下欄外に付し、系統が大きく異なるものは独自の段組で翻刻した。また、各巻末の付録も充実しており、合計48本を収録している。

今後は、聖典オンライン検索の充実や関連講座の開催も企画しており、『浄土真宗聖典全書』をみなさまの研究・研鑽に使っていただきながら、よりよい聖典としていきたい。

五、シンポジウム『聖典全書』の完結を承けて

— 聖典の編纂と普及 —

『教行信証』唯一の親鸞聖人真筆本である坂東本の平成期修復に携わられた三木彰円先生（大谷大学教授）、真宗高田派の聖教に精通しさまざまな聖教の翻刻等に携わられてきた栗原廣海先生（高田短期大学学長）の2名をパネリストとしてお迎えしたシンポジウムでは、先生方にそれぞれ発題いただき、その後、満井秀城（総合研究所副所長）を進行役として、討議を行いました。

① 発題1「教言を聞思する」

三木先生は、真宗大谷派で親鸞聖人750回大遠忌を記念して行われた坂東本『教行信証』の修復・復刻事業や、坂東本の本文を忠実に活字として再現した『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』の編纂に携わられました。その経験から、親鸞聖人のことばのもつ力や、私たちが聖典に向き合う姿勢についてお示しいただきました。以下、概要を掲載します。

【発題1（三木先生）の概要】

親鸞聖人は要文（ようもん）を集め、漢文を訓読することで、『教行信証』を撰述されたが、およそ60歳頃から晩年に至るまで手元に置かれて執筆されたのが『坂東本 教行信証』である。本文だけでなく読み仮名に至るまで、何度も繰り返し訂正を加えられた様子が伝えられている。『教行信証』の大部分が、多くの経論疏（きょうろんしよ）から抜き出された引用のことばである。漢文としてのお聖教を、私たちが読むことばとして親鸞聖人が示すにあたって、返点（かえりてん）や送り仮名（うりか）（右訓・左訓）を施されているが、教えの要（かなめ）に関わる文字は古辞書に基づいて読み方や意味を確かめ、上欄に追記されている。ことばをどう日本語として読んでいけば、み教えがそのまま伝わっていくのか。親鸞聖人はこうしたところに心を配り、長い時間をかけて読み直し、改めるべき所は改めている。原本を見ると、紙に穴が開くぐらい訂正されている箇



【パネリスト紹介】三木彰円（大谷大学教授）
 1965年生まれ。真宗大谷派宗宝史跡保存会調査委員（国宝『坂東本・教行信証』修復に関する調査および複製事業監修）などを歴任。専門は真宗学。坂東本の修復や翻刻に携わった経験をもとに、聖典に向き合う者のあり方について提言する。主著は『『坂東本・教行信証』と親鸞聖人』（真宗大谷派難波別院、2009年）など。

所もある。

親鸞聖人ご自身はみ教えを聞思し続けた方であった。ご自身が聞思したことばを私たちにそのままお示しくださっており、み教えを絶やしてはならない、伝えていかななくてはいけないというお気持ちをおもちであった。親鸞聖人は、自らが聞きとられたことをそのまま私たちに伝えていこうとされている。そのときに、あなたが聞思する人となってください、というところを呼びかけておられる。

「化身土巻」には、龍樹菩薩のことばを引用する中、「義に依りて語に依らざるべし」と書かれている。私たちがみ教えに

出遇うということは、ことばを通してしかない。阿弥陀仏の本願を積尊がお説きになり、それを七高僧が自らに受け止めながら、それぞれのおことばでお伝えくださった。親鸞聖人は、ともに生きる、苦悩する人々を思いつつ、念仏のみ教えを明らかにしていかれた。親鸞聖人が聞きとられたおことばを、まずこの私が聞いていく。ここに聖教に向き合うことの大切さがあるのではないか。

② 発題2 「高田派の聖教と『真宗高田派聖典』」

栗原先生は、真宗高田派の聖教に精通され、『顕正流義鈔蒙引』などの翻刻に携わられたほか、高田派聖典の編纂に関わられています。そうした経験から、高田派聖教の特徴と、高田派における法宝物公開の取り組みについてお話しいただきます。以下、概要を掲載いたします。

【発題2（栗原先生）の概要】

高田派の聖教は、「真宗高田派宗制」に示されている。所依の聖典として、經典（浄土三部経）、論釈（七高僧の撰述）、宗祖撰述、列祖撰述がある。特色としては、

- ① 「十二礼」が龍樹造として加えられている。
- ② 「皇太子聖徳奉讃」が宗祖撰述に加えられている。
- ③ 「列祖撰述」として、「歴代法主の撰述及び御書」が加えら

れている。



【パネリスト紹介】栗原廣海（高田短期大学学長）

1950年生まれ。高田派鑑学。専門は仏教学、真宗学。高田派伝来の聖教についての研究や編纂に携わる。主著は浄土宗総合研究所・総研叢書4『念仏信仰の諸相—法然上人とその門流Ⅱ』（浄土宗務庁、2007年、共著）、高田短期大学仏教文化研究センター編『顕正流義鈔蒙引 翻刻』（高田短期大学、2007年、責任編集）など。

の3点が挙げられる。

列祖撰述の中、蓮如上人と同時代で「中興」とも称される真慧上人の撰述に『顕正流義鈔』がある。高田派は昔から他の派に比べて念仏を高声に称えることから「念仏高田」といわれているように、第十八願に誓われる称名を重視している。しかし、そうした宗風に対して、(1)念仏によって助かろうと思うのは自力だ、(2)念仏によって救われようと思うのは第十九願の心（諸行往生）である、(3)絵像・木像は方便であってこれをたのんでも利益はない、(4)念仏相承の血脈は必要ない、という4つの疑難が寄せられた。それに対して、善導大師や法然聖人、

親鸞聖人によって正統に伝えられたのが高田の流義であり、極楽往生のために信行具足の称名念仏が大事であることを、真慧上人が明快に示されたのが『顕正流義鈔』である。

『御書』には親鸞聖人の御消息が収められている。僧侶も門徒も読経のおわりに必ず拝読する。直接宗祖のことばに教えを請うというご縁をいただいている。歴代上人の『御書』には宗祖・七高僧のことばが引用され、ひとえに祖訓によるうとする高田派の宗風が表れている。

こうした聖典を収録したのが2012年に刊行した『真宗高田派聖典』（春秋社）である。第一に読みやすさをコンセプトとした。仮名は全て平仮名とし、現代的仮名遣いに改め、常用漢字を用い新字体とし、全ての漢字に読み仮名を付した。そのため、史料性・学術性は失われざるをえなかったが、いかに多くの僧侶や門徒に読んでもらえるかを重視した。

専修寺には、親鸞聖人の真筆が多く伝えられている。それを含めた高田派伝来の法宝物を広く公開することを目的として、宝物館の新築を計画している。また詳細は明かせないが、現代の最新技術を使った仕掛けも考えているので、是非ご来場いただきたい。

③ 討議

2名の先生方のご発題を承けた討議では、各派での取り組みについての質疑を中心に、議論が展開しました。



真宗大谷派では『真宗聖典』、真宗高田派では『真宗高田派聖典』が編纂されています。それぞれの編纂時には、いかに親しみやすい本文にするかという「テキスト性の高さ」と、原本の情報をどれだけ正確に翻刻するかという「史料性の確保」と

の折り合いに悩んできたことが明らかにされました。聖典の一文を忠実に翻刻することは、研究者にとっては非常に意義があることです。しかし、現代の僧侶やご門徒がその本文を読めない状態にあつては、親鸞聖人のみ教えを学ぶことが困難になります。このジレンマに立ち向かいながら、各派で聖典編纂に取り組んでいるとのことでした。

諸先生方には、史料性を確保しつつ訓読できるよう配慮した『浄土真宗聖典全書』を高く評価いただきましたが、今の状況からすると、必要に応じたヴァリエーションの聖典があつていとの見解も示されました。各派に所蔵する親鸞聖人の真筆をはじめとする法宝物の原本や写真を拝見することは学びの根本ですが、可能な限り忠実な翻刻とした『聖典全書』の配慮が評価され、その一方で、平素の学習の際には、読みやすさを重視した聖典、さまざまな年代に向けた現代語訳も必要であることから、できるだけ多くの人に触れていただけるような聖典のあり方を模索していることが確認されました。また、各派の宗義は、それぞれの時代において、適切に対応することを意図したものであり、現代の人々が直面するさまざまな問題に真宗の教えが応えていくことにおいても、聖教が基本となることが指摘されました。

さらに、聖典は数多くの方々のご苦勞があつて、私たちのもとに伝えられてきましたが、私たちにとっては、親鸞聖人のことばを聞き、伝えていき、生きる道につなげていく力が、聖典

にあることが示されました。

『浄土真宗聖典全書』全6巻の完結を承け、「浄土真宗聖典」とその他の典籍、原本資料との連絡を深めることで、広く聖典が普及していくことが期待されます。

講演会・シンポジウムを承けて

講演会・シンポジウムには、数多くの方にご参集いただきました。今回は、真宗各派の先生方をお招きしたこともあり、本願寺派のみならず、真宗大谷派、真宗高田派など真宗各派の僧侶・門信徒の方、大学・研究機関にご所属の方にもご来場いただきました。

『浄土真宗聖典全書』は、弊派の刊行物ではありませんが、宗派を超えた寺院や関係学校、研究機関のご協力があつて誕生した新しい聖典です。この『浄土真宗聖典全書』を中心として、漢文をわかりやすい書き下しにして脚註・補註・巻末註など、理解するためのツールを充実させた『浄土真宗聖典（註釈版第二版・註釈版七祖篇）』、聖典を現代のことばで表現した『浄土真宗聖典（現代語版）』、仏教の基本的な用語や浄土真宗の教えや歴史・人名・儀礼などを収録した『浄土真宗辞典』、「浄土真宗聖典」をわかりやすく聞法・学習するための学習誌である『季刊せいてん』など、さまざまな用途に応じた「浄土真宗聖典」をさらに充実させていきたいと思っています。また「浄土

真宗聖典」の学びをより広めるべく、各地で聖典講座を開催しております。各種聖典や講座などを通して、これからも、みなさまとともに親鸞聖人のみ教えを学んでまいりたいと思います。

（総合研究所教学伝道研究室（聖典編纂担当））

1 『御書』は、親鸞聖人や真宗高田派第十世真慧上人など歴代上人によって法義が示されたご消息であり、現在でも勤行（おつとめ）の最後に拝読されている。高田派第十四世堯秀上人によって編纂され、全七巻に『報恩講御書』を加えて八十三通が収められている。